

トーマス・マンの「ヨゼフとその兄弟たち」 に於ける時間の問題（1）

——「魔の山」から「ヨゼフ物語」へ——

深 沢 恒 男

トーマス・マンの全作品を通じて、時間が問題とされるようになったのは「魔の山」（1924）が始めてである。それでまず最初に「魔の山」の時間問題に定める比重と、全作品に対する関連を見出し、それから「魔の山」と「ヨゼフとその兄弟たち」（1933～1943）の関連性⁽¹⁾と時間問題の進展をみていった。この小論ではここまでだけを扱っているが、更に「ヨゼフとその兄弟たち」という神話形式の物語の時間問題に定める位置と意義を見出し、次の作品「ファウスト博士」（1947）では、どのような変化、進展を見せているかを探求する必要がある。しかし「ヨゼフとその兄弟たち」以後の研究は、「ヨゼフ物語」から「ファウスト博士」へという副題のもとに、次回に予定した。従ってこの小論では、前半の「魔の山」から「ヨゼフ物語」への発展と関連が重要な主題となっている。

〔1〕

1924年の「魔の山」をして、トーマス・マンは二重の意味で *Zeitroman*（時間小説）と名づけているが、それは一つにはこの時代の状況を、第一次大戦前のニヒリスティッシュな状況を描こうと努力し、又一つには時間を間接的に書こうと試みていることを示している。単に時代の状況のみでなく、時間という人間の究極的な問題にかかわる主題をテーマにしていることで、この作品は全人的な問題性⁽²⁾をもっている。

「魔の山」では時間問題が四カ所あまりで語られている。まず第四章の「時間感覚についての余論」に於いては、我々の日常の世界の時計によって計られる外的の時間とは違って、この国際的療養所ベルクホーフでは内的な時間が支配しているさまを描いている。所がこの内的時間は感覚と密接なつながりがある以上、習慣によって同じ生活が長く続くと、内的時間、すなわち時間感覚は麻痺し、それにより空虚と単調な日々は大きな時間量をも無に等しくしてしまうのである。この節では主人公であるハンス・カストルプが3週間の予定で、従兄を訪ねて「魔の山」に登って来て、ここの時間感覚の喪失という現象に驚きながらも、彼自身がだんだんその現象に慣れてきそうな段階である。所が作者の〈時間感覚についての考察〉ではハンス・カストルプのこの段階における内的な時間体験は勿論のこと、更にそれ以上の、すなわちハンス・カストルプにはまだ予見不可能な時間体験について、すでに述べられている。

第五章の「永遠のスープと不意の明光」では今までの時間について、時間のもたらす変化について語るだけでなく、この物語自体も時間の支配を、厳密に言えば、時間感覚の喪失という現象による影響を受けていることが述べられている。語り手自身が驚くような形で語ら

れている。「最初の3週間、多くの時間と場所を、――後の3週間、同じだけの行数、言葉、時間を必要としない」（Zb, S. 262.）

所でこの時間感覚の喪失という現象による物語に与える影響を更に考えてみよう。第七章の「浜辺の散歩」では、物語には音楽と違って、二様の時間があることを語っている。一方は物語自体の時間であり、他方は物語の内容の時間である。このことは最初の3週間という物語の内容の時間に対しては、ハンス・カストルプの時間感覚が新鮮であるという理由により、多くの時間と場所を必要とするように物語自体の時間が大きくなっているが、後の3週間になると、「魔の山」の魔的な時間感覚の喪失という現象にまきこまれ、同じだけの行数、言葉、時間を必要としなくなる。このように物語自体の時間が小さくなっていくのである。問題となるのは、この後の3週間のように、物語自体の時間が異常に小さくなる場合である。例えば阿片喫煙者は物語自体の時間にあたる瞬時の間に、物語の内容の時間に相当する大きな時間量、10年、20年の夢をみるのである。「物語の内容的時間が物語自体の持続を縮小して――幻惑的な、魔的な要素を――」（Zb, S. 765.）

このように作者の従来のも物語形式をこわす〈時間についての考察〉が、ハンス・カストルプの内的な体験の総計として、又予言的なものとして、密接な関係のもとに述べられているだけでなく、物語自体の構成をも、この時間の問題が規定している。従来のも物語の叙事的性格をこわすかに見える作者の時間についてのエッセイの侵入は、決してこの物語全体から浮上っているのではなく、むしろ逆に主人公の内的体験と密接に結びつき、或る時は先導者として、或る時は審判者として、共にこの物語の流れを進めており、この物語の性格を特徴づけている。そして作者が物語の中のエッセイという形によって、この物語に批判的な性格を、第三者的な立場を提供しているのである。しかしながらこの批判的な性格は決してこの作品から遊離しているものではなく、主人公の内的体験及び作品構成と不可欠の関係にある。というのもこの批判的な性格が「魔の山」に於いては、時間の問題提起という姿で集約され、集中されているからである。「魔の山」というタイトル自体がすでに下界とは違った秩序をもった、時間感覚の喪失した場所として示されている。とすると作者が時間感覚の喪失という現象を設定した意図が大切な問題になる。

H. Koopmann の「トーマス・マンによる知的小説の発展」では、時間の問題が、物語の叙事的性格を破壊することなく、いかに結びつけられているかを論じているが、それだけでなく、物語形式の破壊の危険を冒しても、時間を論じようとする作者の意図が重要である。物語の構成上から、トーマス・マンの思想上から時間は論じられねばならない。

従って「魔の山」と下界との差異が時間感覚のある、なしに設定されているかぎり、ひとりの単純な青年ハンス・カストルプがベルクホーフへと登ってくるという冒頭の箇所が非常に重要な意味を担っている。時間感覚のある所から、ない所へ移動したら人間はいかなる影響を受けるか？ それが単純な青年ならその影響は大きいのではあるまいか？

平地に存在する時間は外的時間、つまり人間の内的な感覚によって感じた時間ではなく、それ以前にすでに一つの与えられた秩序、規則として存在する時間である。従って現秩序の維持に肯定的であるから、その態度は倫理的といえる。所が時間感覚の喪失とは、このような外的な秩序形態に対して否定の立場に通じる。故にこの態度は現秩序の側からみれば、非倫理的ともいえる姿勢である。この点に関して、人文主義者ゼテムブリーニが教育者としての立場から、ハンス・カストルプに下界に戻ることをすすめる、「時間は下界のみに存在する」

といったのも、彼の倫理的態度を示すことに他ならない。そして「魔の山」が現秩序の解体を意味するものであるので、この魔的な状況はまさしくデカダンスの状況を示している。このようにデカダンスの状況を、時間感覚の喪失した「魔の山」というものに形象化し得たという点に、この作品がデカダンス脱却という方向をめざしていることは明白である。そしてハンス・カストルプの性格が単純で夢想する癖があり、しかも幼時から死に対する親近感があるので、この魔的な「魔の山」にびったりと適合する素質をもっている。それが結局三週間の予定⁽³⁾から、長期滞在という結果にもなる。このようにデカダンスの状況に対して反撥するのでなく、むしろその状況を逆手にとって、その状況の中で自然に成長⁽⁴⁾していく形をとることにより、天才への道に進むことになる。むしろここではデカダンスの状況が、「つまりき」のテーマという教養的意図をもったものに逆転せられている。

所で「魔の山」の時間と下界の時間との差異についてもう少し考えてみよう。第六章の「変化」では時間のもつ神秘性について、その動詞的な性質について語られている。時間のもつ性質はある変化を生じさせることである。つまり「現在は当時ではなく、こゝはあそこではない。というのも両者の間に変化がはさまっている」⁽⁵⁾(Zb, S. 439.) からである。所が「この時間を計る規準となる変化なり、運動なりが循環的であるなら、当時が現在のなかに、あそこがこゝにたえずくり返されるから、その運動や変化は静止とか停止に表現出来る。それ故時間や空間を永遠で無限なものと考えたことに決めたのである」(Zb, S. 439.)。永遠のなかでは少しの進歩でも、それは無とになってしまう。進歩というのは、「メリー・ゴー・ラウンド式の転回」の円としての時間ではなく、「まっすぐ前方へ」という直線としての時間である。この直線としての時間には明白に過去・現在・未来の区別が存在し得るが、円としての時間の場合には、その区別ははなはだ不明瞭となる。例えば「魔の山」の住民であるが、彼等には時間感覚がないので、日々はどんどん過ぎ去ってしまっている。彼らの単調で空虚な生活のなかで区切りをなすものは、祝祭、すなわち復活祭とかクリスマスである。これこそが永遠に単調なリズムの区切りをなすものであった。所がまたしても、こゝに「まだ」と「また」と「このさき」という区別がつかなくなってしまうので、いまの現在の祝祭と、一年前、二年前の現在の祝祭の区別がつかなくなり、いまの現在は永遠の現在となってしまふ。そしてこの祝祭により、時間が止揚され、過去の事象の現在化がなされるようになる⁽⁶⁾。

我々の人生に関する重大関心は、我々が何処から来て、何処へ行くか？という問題に集約される。そして未来に対する関心はまず過去に対する関心から始められねばならない。過去とのつながりの回復、それによって孤立した存在に連帯感が与えられる。これが円としての時間に求められる。このことは又外的な時間による人間の支配を排し、新たな可能性をもつ内的時間の獲得につながっていく。

〔Ⅱ〕

円としての時間に於いて、時間が止揚され、過去の事象の現在化がなされることはすでに述べたが、このことは主観的な円としての時間に、過去の客観性のある実在が加わることを意味する。そして主観的な、個人的なものから、広く客観性のある存在へと向う。それが時代を超えての連帯感につながっていく。ハンス・カストルプは幼少の頃より、祖父に洗礼盤をみせてもらうのが好きであった。というのもその皿には歴代の家長の名が七つも彫られて

おり、「そのウル，ウル，ウルという音が，ハンスには時間の埋没を意味すると同時に，過去とのつながりを感じさせ，なんとはなしに彼の気持を良くさせたのであった」（Zb, S. 33.）。「ヨゼフとその兄弟たち」の中の「ヤコブ物語」（1933）でヨゼフが自分の個人的な物事の始りをウル（Ur）という都市に見出していることにも示される⁷⁾。このような自分と祖先との同一視⁸⁾ということが，過去とのつながりを回復させ，孤立した存在から解放させる。ハンス・カストルプには，ヨゼフにはこのように幼時から，過去とのつながりを意識する作用が特に著しかった。この時間を忘れるという特質は，夢見るような，ぼんやりとした素質と決して無関係のものではなかった。

そしてこの時代を超えての連帯感がハンス・カストルプ一人のものではなく，広く人類の祖先へのつながりとなり，歴史を超えた共同体の意識にもなる。「人は自分の魂だけで夢を見るのでなくて，見方は自己流だが，無名で共同の夢をみるのであること——ハンスが小さな部分にすぎないような大きな魂があって，その魂がハンスを通して，その魂のいつもひそかに夢見ている事柄を夢見るのであること」（Zb, S. 698.）。このような夢により，ハンス・カストルプは一人ではなく，人類共同体という大きな意識の中につつまれてしまう。

いままで述べて来たように，過去とのつながりと，ハンス・カストルプの素質，つまり夢見るようなぼんやりとした，死に親しむ性質や，洗礼盤のウルの音に興味を引かれる特徴は密接な関係をもっていた。このようにトーマス・マンにあっては「素質」という問題が大きく作品の中でも幅をきかせている。あの有名なトニオ・クレーガーの言葉，「僕には南方と北方の血が——」（TK, S. 270.）でもすでに矛盾した自己の内面性や二律背反の血をもった性格が見出される。このような問題性によって，後の作品の中でも，二律背反のテーマがくり返される。円としての時間自体が現在と過去という二律背反の総合ではないだろうか？

このような現在と過去の総合，人類共同体の意識，祖先との同一視という時，「魔の山」から「ヨゼフとその兄弟たち」への進展が見られる。更に「物語は過去のことでなければならぬ，過去であればある程，物語としての特質にあってくるし，——過去形の呼び出し手である物語り作家にとっても都合がよくなる」（Zb, S. 5.）から「物語の過去の性格というものは，物語が昔のものであればある程，いっそう深く，いっそう完全で，いっそう童話風なのではあるまいか？」（Zb, S. 6.）と語っているが，トーマス・マンの意図した所ものは，単に物語り手と対象の時間的な距離の設定だけではなく，第一次大戦前の出来事を過去形で語るという設定で，何か伝説的な，深い内容をもった，完全な物語を作り出そうとしたのではないだろうか？ しかも完全でありながら，夢のような，魔的な物語の創造である。童話風（märchenhaft）という時，想像力に満ちた非現実の世界を呼び起し，完全な（vollkommen）という時，この非現実なものに何か実在の確固としたものを与える試みをなしたのではないだろうか？

「ヨゼフとその兄弟たち」では，エジプトが死者の国⁹⁾とされているが，この死者の国下りは，「魔の山」という病人の国，死者の国へ来るテーマと共通である。しかも高所にある「魔の山」自体も，ゼテムブリーニにいわせれば，下方に存在する。「死者達がたわいもなく，無意味に生活しているこの深所へ下ってこられるとは——」（Zb, S. 83.）。「ヴェニスに死す」（1912）のヴェニスも又この死者の国であった。しかし「魔の山」や「ヨゼフとその兄弟たち」に於ける死者の国は，時間感覚の喪失した，秩序のない，夢的な世界を示

すと同時に、ゲーテの「死して生れよ」の内容を含んでいる。トーマス・マンの言葉を使えば、「新しき未来の為に死ぬことが大切」(Zb, S. 926.)なのである。時間→時間感覚の喪失→新しき時間の獲得という進展が、今度は教養的な新しいテーマを含み、生→死→生に行くというゲーテの言葉で示される内容をトーマス・マンも追求している。しかしトーマス・マンの場合、教養的なテーマ⁽¹⁰⁾のみならず、時間のテーマが加わっているという事実が、20世紀の新しい問題意識の発生を示している。デカダンスの状況、時代に対する新しき問題意識が、新しき物語形式⁽¹¹⁾を呼び、新しき時間の獲得を要求している。それ故内的時間の獲得をめざす理由こそ、この新しき時代に対する問題意識に求められるべきなのである。従って時間が問題になることは、トーマス・マンにあっては時代も同時に問題になる。

「死して生れよ」のテーマは「ヨゼフとその兄弟たち」にも見られ、愛らしいが、うぬぼれの強い少年が、兄弟たちにより井戸の中に投げ込まれ、やがて死者の国であるエジプトへ下り、そこで生と精神の統合を見出すようになる。いずれにせよ、新しき生の為には一度死なねばならぬという教養的な「つまずき」のテーマが設定されている。このように「魔の山」と「ヨゼフとその兄弟たち」の間には種々の類似がみられる。死者の国下り、つまずきのテーマ、祝祭、メリー・ゴーン・ラウンド式の時間等であり、さらにハンス・カストルブに対するショーシャ夫人、ヨゼフに対するムト＝エム＝エネトの配合には、純粹精神という自己満足的な結果に終りやすいものに対する、肉の吸収という配慮がみられる。この有機的なものに対する愛の実現が生と精神の二律背反の解消を促すのである。

初期の市民と芸術家、生と精神の対立は、一見両作品「魔の山」と「ヨゼフとその兄弟たち」では登場していないように見えるが、実はそうではなく、違った形で、新しい意味をもってあらわれている。初期の作品では「トニオ・クレーガー」(1903)のトニオが「迷える市民」(S. 270.)⁽¹²⁾といわれ、「道化者」(1897)の道化者は「私は書くのを止めたい」(S. 68.)、「餓えた人々」(1903)のデトレフは「芸術家であるよりは、人間でありたい」(S. 199.)、「トリスタン」(1903)のシユピネルは「避け難き天職」(S. 165.)とそれぞれ叫んでいる。ここで初期の作品群と「魔の山」や「ヨゼフとその兄弟たち」の差異をみてみれば、どちらも二律背反の原罪を背負いながらも、初期の作品群に於いては、それが一人の人物の内面的な葛藤となっているのに反し、「魔の山」と「ヨゼフとその兄弟たち」に於いては、主人公ハンス・カストルブやヨゼフをめぐる諸人物、諸事象にそれぞれ形象化されている点に特色がある。「魔の山」では、この療養所ベルクホーフが死者の国(病人の国)を示し、人文主義者ゼテムブリーニが西方の原理を代表し、生と進歩と未来を説く。それに反し、ハンス・カストルブに肉への愛を知らせるショーシャ夫人がアジア的原理を代表し、死と停滞と過去を表わす。特に生と死との対立は、ゼテムブリーニと彼の論敵であるイエズイット教徒ナフタに克明にあらわれる。「ヨゼフとその兄弟たち」ではエジプトが死者の国であり、ヨゼフの父ヤコブは神の精神性をあらわしている。ヨゼフの使命は、丁度ハンス・カストルブが西方の進歩と未来を説くゼテムブリーニのみでなく、東方のショーシャ夫人から肉への愛を知らされたように、精神というものに深所からの祝福、生根源とのつながりを回復させることであった。

そしてヨーロッパ的原理が生と進歩と未来であるという時、それは直線としての時間を暗示し、アジア的原理が死と停滞と過去であるという時、それは時間感覚の喪失を、円としての時間を示している。従って西方対東方というように、作者の視点の広がりを見せている作

品に、初めて〈Zeit〉が問題とされるようになったのも、二重の意味で〈Zeitroman〉であるその一方の時代の状況に対する関心に他ならない。「ヨゼフとその兄弟たち」も神話形式という形を借りてはいるが、単に時代を隔てた神話であるとするのではなく、「魔の山」と同じように〈Zeitroman〉⁽¹³⁾であると考えべきなのである。

このように「魔の山」から「ヨゼフとその兄弟たち」という神話形式への進展は、すでに「魔の山」でもアポロとディオニユスの原理が、トト＝ヘルメス神⁽¹⁴⁾が登場していることでもあらわされる。「魔の山」の「雪」の項でアポロとディオニユスの原理がみられる。「どこかの海、南の国の――人々、つまり太陽と海の子らが――それはかしこくて、快活そうな、美しい若者らで、見るからに気持のよい人々だった」(Zb, S. 693.)。ところが今度はそのアポロ的な光景が一変して、その美しい光景の背後に「ふたりの老婆が――残忍しごくにふけていたのである。――幼児を引き裂いていた。」(Zb, S. 697.)という恐ろしい血の饗宴が行われる。しかしハンス・カストルプは天才への夢の中でこう悟る。「あの物凄い饗宴のことをひそかに考えていたからこそ、太陽の子らはあのように礼儀正しく、愛想よくし合うのだろうか？」(Zb, S. 699.)。このアポロとディオニユスの合一こそ、ディオニユスという破戒し、生成する生根源の力を取り入れて、新しく再生することであり、それが「新しき未来の為に死ぬ」ということなのである。これは「ヨゼフとその兄弟たち」においてタムツ＝オジリス＝アドニス (Tammuz＝Osiris＝Adonis) という、引き裂かれた後で、生まれ変わって神となる人間再生の物語を提供するものになる。

〔Ⅲ〕

「ヨゼフとその兄弟たち」に於いては「魔の山」でみられる直線としての時間と、円としての時間の対立は解消し、円としての時間が〈くり返し〉という形で再現される。トーマス・マンは記念講演「フロイトと未来」(1936)に於いて、このくり返される祝祭について語っている。「祝祭とは時間の廃止であり、出来事であり、一定の原型により演じられるおごそかな行為であり、ここで起ることは、始めて起るのではなく、祭りとして模型に従う」(AG, S. 518.)。「神話とは秘密の衣にすぎない。しかし秘密の礼服は祝祭であり、くり返されるものであり――」(JB, Ⅲ, S. 50.)。ここにトーマス・マンの意図した神話形式の登場が理解される。そして神話でも特に「ヨゼフ物語」を選択したのは、ここで生と死の根本問題を扱う試みなのである。「死ぬということは確かに時間を失い、時間から出ることであるが、その代りに永遠を、遍在を得ることであり、それ故始めて真に生を得ることである。というのは生の本質は現在であり、ただ神話的にのみ、生の本質は過去と未来の時称のなかに現われる」(JB, Ⅲ, S. 49.)。そしてこの生の本質の追求は、ヨゼフ個人のものだけでなく、人類共通のものとなっている。古代の自我と意識は、現代の孤立した自我とは違って、くり返しにより、祖先の自我と同一視⁽¹⁵⁾することが出来たのである。「古代の自我とそれが自身について持っている意識は、我々のものとは違っていた。――それはいわば背後にひらいており、存在していたものから多くのものを取り入れて、現在に再現し、自身と共に再びくり返すのであった」(AG, S. 516～517.)。過去とのつながりの回復、それにより孤立した存在から、普遍的なものへと向っていく。この普遍的なものへの指向や特殊なものの特異化⁽¹⁶⁾こそ、神話に他ならない。物語が過去の泉に深く降りるのも、時代を超えた人間の本質的問題を探る為である。「物語の祝祭、お前は生の秘密の礼服である。という

のはお前は人々の意識の為に、無時間性を作成し、神話を呼び出し、その神話を正確な現在の内に起らせるから」(JB, III, S. 50.)。

神話への進行は、トーマス・マンに特有なものではなく、J. ジョイスの「ユリシーズ」や H. プロッホの「ヴェルギリウスの死」にも見られる。しかしトーマス・マンにあっては神話への進行は、神話の精神化を意味している点に特徴がある。人間の存在の深層へ深く入るということ、魂の奥深くへ入るということは、過去に深く浸透することであり、時間の深層へ下降すること⁽¹⁷⁾なのである。過去にある神話を現在に、未来にもたらしことが精神化としてあらわれる。所でトーマス・マンにあっては、世界は「物質と精神と靈魂」(JB, III, S. 36.) の三要素に分けられる。「精神は本来全く本質的に未来の原理であり、<それはあるだろう>、<それはあるべきだ>を現わすが、形式と結びついた靈魂の敬けんさは過去に、聖なる<それはあった>に関係する」(JB, III, S. 44.)。そして「靈魂と精神が一つのものであったという言明は、実際それらが将来一つのものになるべきだと、述べようとしているのかも知れない」(JB, III, S. 44.) ので、求める結果は「精神が本当に靈魂の領域へ入ることであり、この両方の原理がお互いに浸透することであり、他方によって一方が神化することである」(JB, III, S. 45.)。従って人間は「上の天からの祝福と下の深所からの祝福」(JB, III, S. 45.) を受けることになる。この「ヨゼフとその兄弟たち」によって展開される死の祝祭 (Todesfest) も地獄行き (Höllenfahrt) もこの両方からの祝福を求める為であった。

このような「天からの祝福と深所からの祝福」は又「太陽の祝福と月からの祝福」(JB, III, S. 107.) と表わしてもよい。そして父のヤーコブの祝福は前者のものであり、母のラケルの祝福は後者のものであった。それ故この両者の子であるヨゼフには当然仲介者としての使命が託せられている。

この仲介者のヨゼフはトト=ヘルメス神の似姿⁽¹⁸⁾なのである。ヘルメス神⁽¹⁹⁾はトリスメギストス (Trismegistos) としては、エジプトでの名称トト (Thot) としては「文字や計算の為の数字、更にはオリーブ栽培やずい説得術⁽²⁰⁾」(JB, V, S. 158.) などを行い、プソコーポムポス (Psychopompos) としては「死者すらも、月の国へ連れて行くし、夢までも案内する」(JB, V, S. 158.)。この神は結局「天上と地上との仲介者」(JB, V, S. 185.) の仕事をする。

〔IV〕

神話的なものとは、述べて来た如く典型的なものであるし、その典型的なものは過去とのつながりの回復によって求められる。

所でこの過去とのつながりの回復ということにあたって、フランスの小説家である M. プルーストの無意識的記憶作用を思い出してみた。今ここで少しばかり、M. プルーストの試みとトーマス・マンの試み⁽²¹⁾を比較してみたい。外的時間から内的時間へ、つまり過去、現在、未来と直線的に流れる時間から、内的な、主観的な時間への進展ということでは、両者は共通⁽²²⁾であるが、M. プルーストにあっては、過去の現在への復活ということが、単なる個人主義的な、感覚的なものに終始しているのに対し、トーマス・マンの場合、その主観的な時間が更に人類共同体という大きな夢の中に吸収され、個人主義的なものに、普遍的な要素が加えられている。そのことは又 M. プルーストの過去の実在感の回復が、現在のある

物に対する感覚のふれ合いがけい棧となり、その瞬間彼の無意識的な記憶作用によって、現在の感覚とつらなる過去の事物とのふれ合いの感覚、体験が呼び起されることを示している。「そして現在にあって、音や肌着の接触等によってもたらされた私の感覚の有効な震動は、想像力の夢に、いつもは奪いとられるのであるが、存在の観念をつけ加えたのであった。——私の存在に決してとらえることの出来なかつたきらめきの持続、すなわち純粹状態のわずかな時間を捉え、引離し、動けなくすることを許したのであった」（*Le temps retrouvé* P. 872.）。それ故 M. プルーストにあっては感覚の作用が重大な働きをなしているが、トーマス・マンでは今まで述べてきた如くに、時間の問題が、知的に、分析的に、神話に形象されている。

従って M. プルーストの場合では、過去とのつながりによる実在感が、幼年時という純粋な感覚をもった時期に獲得された実在感となる。この点では一見、トーマス・マンと同じように見えるかもしれない。しかし M. プルーストの実在感の獲得が、幼年時の純粋な感覚による体験という風に、「感覚」に重大な比重が置かれているのに対し、トーマス・マンでは過去の実在感が、幼年時のものでありながらも、「素質」に、従って祖先からの血のつながりに、普遍的な確固たる存在物に結びつけられる。過去とのつながりの回復が、感覚にもとづく回想作用による限り、それは瞬間的なものにしかすぎない。しかし素質に、血のつながりにもとづく限り、それは永遠的な確固たる存在物に変身する。

神話の形象化や、ヨゼフをして、多種多様な姿をとるトト＝ヘルメス神に変身させることは、円としての時間、くり返しての時間により達成する。時間の問題こそ、トーマス・マンにあっては全人的な、形而上的な大きな問題⁽²⁸⁾となっている。

（昭和41年9月30日 受理）

注

- (1) Helmut Koopmann : Die Entwicklung des ‚intellektualen‘ Romans bei Thomas Mann, 1962, S. 156. 参照
- (2) J. Weigand : The Magic Mountain, P. 164. The stature of Thomas Mann 所載
- (3) Klaus Schröter : Thomas Mann, rororo, S. 98. 参照 夫人の病氣見舞いの為、三週間の予定でダボオスに訪れた。その際医者に彼自身長期滞在するようにすすめられたが、強く下山した話がある。従つてハンス・カストルプの性格はトーマス・マンの否定的要素の形象化とも考えられぬことはない。
- (4) Paul Altenberg : Die Romane Thomas Manns, S. 62. Herman Gentiner Verlag
- (5) Nietzsche's Werke, Also sprach Zarathustra, S. 324. 参照 円としての時間はニーチェの氷遠回帰の思想の影響が強い。
- (6) Joseph und seine Brüder III, S. 391.
- (7) ibid., S. 7.
- (8) ハンス・カストルプは、幼き日の友であるヒツベに対する愛が、又現在のショーシャ夫人に対する愛であることを知る。ヒツベとショーシャ夫人の同一視がある。
- (9) Joseph und seine Brüder III, S. 11.
- (10) ゲーテの「ヴィルヘルムマイスター」に対しては「魔の山」がパロディ的な性格をもちながらも比較され (Hans Eichner : Thomas Mann, S. 36. 参照), 更に「ヨゼフとその兄弟た

ち」は「ファウスト」に比べられる (K. Schröter の前掲書 S.117. 参照)。

- (11) 「知的小説」とか「批評的小説」の登場がそれである。H. Koopmann 前掲論文 S. 3. 以下参照
- (12) 以下 Erzählungen 中のもの。
- (13) Käte Hamburger : Deutsche Vierteljahrs Schrift 所載の論文, Die Zeitlosigkeit der Dichtung, (1955, Heft, 3) S. 417.
- (14) Der Zauberberg, S. 739.
- (15) 神話の思考方法である模倣と同一視については Käte Hamburger : Der Humor bei Thomas Mann, Nymphenburger, S. 71.
- (16) H. Koopmann の前掲論文 S. 165. 参照
- (17) 「20世紀のドイツ文学」所載の「20世紀のドイツ叙事文学」ベルンハルト・ラング P. 66.
- (18) 「現代文学」W. イェンス P. 127. 参照
- (19) この神に関しては H. Koopmann の前掲論文 S. 159. 参照
- (20) 詐欺師フェリックス・クルルとの類似が感じられる。
- (21) Thomas Mann, Briefe 1889-1936, S. Fischer Verlag, an Käte Hamburger, 12. x. 32., S. 323. 参照
- (22) Käte Hamburger DVJ 所載の前掲論文 S. 416. 参照
- (23) Heinz Saueressig : Die Entstehung des Romans 所載の E. R. Curtius : Der Zauberberg, S. 53.

Thomas Mann 全集は Aufbau 版による。但し「Briefe」のみ Fischer 版。ブルーストの作品「失われた時を求めて」はプレイアード版による。ニーチエの作品は Taschen 版による。

Zb = Der Zauberberg

JB = Joseph und seine Brüder

AG = Adel des Geistes

TK = Tonio Kröger

Summary

Das Problem der Zeit in Thomas Manns Joseph und seine Brüder

Tsuneo FUKAZAWA

In diesem Aufsatz handelt es sich um das enge Verhältnis zwischen Zeit und Dichtung. Nicht nur in den Romanen Thomas Manns, sondern in der Dichtung des 20. Jahrhunderts spielt das Problem der Zeit, direkt oder indirekt, eine grosse Rolle. Aber der Zeitbegriff bei Thomas Mann ist auf andere Weise als der bei Bergson, Proust, Joyce usw.

„Der Zauberberg“ ist für Thomas Mann im doppelten Sinne ein Zeitroman. Und auch in den Joseph-Romanen, wie im „Zauberberg“ ist die Zeit thematisch. Vom „Zauberberg“ zu „Joseph und seine Brüder“ verfolgt Thomas Mann parodistisch und ironisch das Typische und Mythische. Das Typische ist nach Thomas Manns Denkweise das Mythische.